

【常設展示】

知は海より来たる

プロローグは西洋からの「知」の入り口であった出島をイメージ。洋学がどのように発達していったのか、歴史をたどる旅の出発です



プロローグ室

人体に隠された科学への扉

展示室[1]では『解体新書』など蘭学が始まったころの資料や、津山藩に初めて蘭学をもたらした宇田川玄随、玄真、榕菴の業績を紹介



展示室[1]

欧米諸国から開国を迫られた幕末。津山藩医・箕作阮甫はアメリカやロシアとの交渉で力を尽くします。展示室[2]では阮甫の生涯と省吾、秋坪を紹介



展示室[2]

開国から明治維新、激動する時代の中で洋学の重要性が高まっています。展示室[3]では日本の近代化に貢献した津山の洋学者たちに迫ります



展示室[3]

世界へと開かれていく眼

日本の近代化と津山の洋学者

【開館記念特別行事】

新館開館式

オランダ・シーボルトハウスとの友好提携館締結調印式も併せて行います
とき 3月19日(金) 午前10時～

開館記念企画展

「工芸にみる江戸の阿蘭陀趣味～神戸市立博物館所蔵名品選～」
とき 3月19日(金)～4月18日(日)

開館記念講演会

とき 3月28日(日) 午後1時30分～3時
演題 盆地の知性は世界へ
講師 樺山紘一さん(印刷博物館館長・元国立西洋美術館館長)

津山と洋学

江戸時代の日本は、鎖国によって外国との交流を制限していました。西洋諸国のうちで唯一交流のあったのがオランダで、学者たちはオランダ語を通じて西洋の学問や文化を取り入れようとして、和蘭の学問(蘭学)が生まれます。津山藩からは、蘭学や洋学(より広い意味で西洋の学術のこと)を研究した洋学者がたくさん出ています。その中心的存在だったのが、宇田川家と箕作家です。

「腺」や膀胱の「脬」は、実は玄真が考えて作った文字です。また、玄真は緒方洪庵らたくさんの弟子を育てていて「蘭学中期の立役者」ともいわれています。玄真の養子となった榕菴は、医学だけでなく植物学や化学へと研究を広げて、日本で最初の本格的な植物学書『植学啓原』や化学書『舎密開宗』を刊行。「日本近代科学の生

津山洋学

近代科学を紹介した宇田川三代津山に本格的に洋学を紹介したのは宇田川玄随です。玄随は江戸詰の津山藩医で、杉田玄白や桂川甫周に学び、10年という歳月をかけて『西説内科撰要』という日本で最初の内科医学書を翻訳し、紹介しています。玄随の跡を継いだのは伊勢出身の玄真です。玄真が刊行した外科書『医範提綱』はベストセラーになり「大腸」や「小腸」など体の器官のうち、この本で名前が定着したものがたくさんあります。リンパ腺の

「みの親」といわれています。他にも動物学や西洋音楽の研究を始め、温泉の成分分析を行ったり、コーヒーを調べたり、オランダカルタ(トランプ)を模写したりと、その旺盛な好奇心には驚かされるばかりです。榕菴はまさにマルチ学者だったのです。

が来航した時には交渉団の一員として長崎へ赴くなど、外交交渉に活躍。また、幕府が洋学者を育成するために蕃書調所(後の東京大学)を設立すると、初代教授に任命されました。そのため阮甫は「大学教授の第一号」ともいわれるのです。

刊行。坂本龍馬や吉田松陰、桂小五郎ら幕末の志士が愛読したことでも知られています。同じく養子となって箕作家を継いだ秋坪は、幕末に2度も外交交渉のためヨーロッパやロシアへと派遣されています。開国という大きな時代の波を越え、阮甫の孫たちは海外へと飛び立っていきました。そして麟祥はフランス法典の大家となり、大麓は数学者、佳吉は動物学者、元八は西洋史学者となつて、学術・教育の面から明治の日本を支えたのです。

箕作阮甫の活躍

代々江戸詰の宇田川家に対し、箕

阮甫の子孫たち

阮甫の養子となった省吾は地理書『新製輿地全図』と『坤輿図識』を

地元で活躍した医師たち

一方郷土津山でも、杉田玄白の愛弟子・小林令助や、医師で自由民権運動にも参加した仁木永祐、藩主人の乳がん摘出手術を成功させた久原洪哉など、洋学を学んだ医師たちが地域医療や教育分野で活躍します。このように立派な業績を上げ、さまざまな活躍をした洋学者たちを大勢輩出したことから、津山は「洋学のまち」として知られるようになったのです。